

『過程の演習 新国語問題集』補足・解説・解答

11 「中将姫本地」

●印の単語（鍵になる語）の正確な意味を記せ。多義語については、今回の意味以外の意味も記せ。数字は行数。

3 ●聞こし召す（多義）

3 ●何として 問3①

4 ●はかなくなる 問2ア

8 ●あそばす 問2イ

9 ●ならひ 問3③

11 ●わたる（多義）

12 ●かたらふ（多義） 問4

13 ●由（多義） 問4

13 ●生ず

14 ●讒奏（讒言）

18 ●あながちに 問3④

19 ●いとほしみ（いとほし） 問3④

19 ●世にあり

20 ●禁中

21 ●しかじ（しかず）

22 ●つたなし（宿世つたなし） 問6

24 ●かつうは（かつは）

26 ●時を移す

問1 （文法）「のの一部」と書く。

問2 （単語の意味）●単語

問3 （現代語訳）●単語

問4 波線部Aに「北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」とある。

1 北の方が「安からず思し召し」たのはなぜか。簡潔に説明せよ。

北の方（継母）が心穏やかではなかったわけは？ ▼なぜ、は直前。

〔参照箇所〕「姫君、十三にもならせ給へば、容顔美麗にして天下無双の人にて渡らせ給へば、帝よりは后に立ち給ふべき由（＝旨）、勅使、度々重なりければ、豊成も喜び給ひて、その御喜びは限りなし。」

傍線部を訳す。「帝から姫君に后になるようにという使いが何度も来た」から。少し言葉足らずなので、北の方の姫への思いを入れて、

（解答例1）憎んでいた姫君に、帝から后になるようにという使いが何度も来たから。（33字）

「入内」という語を使えば、もっと内容を盛り込める。

（解答例2）憎んでいた姫君が美しく育ち、入内の誘いまであったことが、ねたましかったから。（39字）

2 何のために、「人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」たのか。簡潔に説明せよ。

「何のために」に対して☆端的に答える。それは「入内阻止」。これを終わりに置くこと。その前には、この後、彼女がやったことをそのまま書けばよい。

（解答例）姫君に男が通ってきているように見せかけ、その様子を父の豊成に見せ、入内をあきらめさせるため。（46字）

◎問5 波線部Bに「頭を刎ねよ」とある。豊成が姫を亡き者にしようとしたのはなぜか。六十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

▼なぜ、は直前。

〔参照箇所〕「如何にもして世にあらせんと思ひつるに、口惜しき振舞ひしけるこそ悲しけれ。明日にもなるならば、この事漏れ聞こえ、禁中の物笑ひは豊成が女子にはしかじ」

二点ある。愛情をかけ期待していたのに裏切られたこと。宮中の物笑いになりたくないこと。重点は、後者。知られる前にひそかに消そうというのだ。でもまあ、娘の首を刎ねよと命じるとは！ 六十字に収めるのが、少し窮屈。

（解答例）姫が男たちを通わせ、親の愛情を裏切ったことを知り、また、それが知られ、宮中で笑いものになることに耐えられなかったから。（59字）

問6 波線部Cに「我、前世の宿業拙くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず」とある。

1 「人の偽り」とは何か。「人」が指す人物を明記して、具体的に説明せよ。

読み取れた範囲で、なるべく具体的に書くのがよい。人物名を確実に入れること。

(解答例) 継母が、姫君が男を通わせているようにしくみ、父に見せて信じ込ませたこと。

2 姫君は、「消えなん事力及ばず」とこの事態を受け入れる。それはなぜか。「前世の宿業」を解説しつつ、五十字以内で説明せよ(句読点を含む)。

▼なぜ、は直前。端的にいうと、「前世の宿業拙くして」が理由。「宿世つたなし」とか「武運つたなし」というときの「つたなし」は、(前世からの／武士としての)運が悪い、の意味。しかし、それだけでは…。「力及ばず」といつているのに注意。自分としては、こうしたけれど、力及ばず、運命のせいでこうなる、それはしかたない——こういう流れであることがわかる。ここまでの話を簡潔に整理して、

・自分は母を求め、継母にも従ってきた。

・しかし、継母は自分を憎み、陥れた。

●こうなったのは前世からの運命のせいなのでしかたない。

(解答例) 自分は継母に従ってきたのに、継母は自分を憎み、陥れたが、それは前世からの運命のせいなのでしかたないと思っているから。(58字)

この解答例は、どういう力が及ばなかったというのか、と問いを立て直したものは及ばず、力以外の作用でこうなった、という組み立て。「力」というなら、「それは偽りだ」と告発することも可能なのだが、彼女は基本的に父も継母も批判しない。そういう生き方をしてきたからだ。私たちからすれば特異に見えるかもしれないけれど。——ただ、この解答方法は、妥当だけれど、ちよつと字数を食う。

冊子の解答例は、「前世からの運命」の部分だけを敷衍して、「前世／現世」の対比として説明している。四十字程度にしようとするなら、こうなるか。

問7 波線部Dに「武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける」とある。

1 「しばらく時をぞ移しける」とは、姫が何をする時間を取ったのか。具体的に説明せよ。

〔参照箇所〕(姫の言葉)「その故は、我七歳の頃より称讃浄土御経を受け奉り、毎母尊霊に手向け奉り、今日はいまだ読まず。1且つうは父の御祈りのため、2且つうは母亡魂、出離生死・頓証菩提の御ため、3または、自らが剣の先に掛かりなば、修羅の苦しみも免れ、浄土の道の導ともせん。」

☆端的に「お経を読む時間」。何を足すか。何のためのお経(祈り)か、が述べられているので、それを足す。三点ある。父のため。亡き母のため。自分のため。「称讃浄土御経」は、その名の通り、「浄土」に導かれるためのお経。「母の後世菩提を弔ふ」ともあつたように、後世(前世↓現世↓後世)、極楽往生を遂げるようにという祈り。このへんは、古典世界の世界観の常識。

(解答例) 父、亡き母、自分が極楽往生遂げるようにという祈りを込めてお経を読む時間。

2 ここで、武士は何に心を動かされたのか。四十字以内で答えよ(句読点を含む)。

▼直接書いてないタイプ。小説の読解スキルで解決しよう。武士の視点でこの様子を見直す。猶予を与えたということは、「殿のご命令には背きません」といつていた武士に、心の変化が生じたことを示す。姫は父の命令で殺されることを武士から聞いた。しかもそれは継母の讒言によること、自分は無実であることも知っている。ふつうなら、抵抗を示したり、感情的になったりするとところだ。武士は、事実を知ったとともに、姫の態度に驚きを感じ、それが心の変化(恐らくは姫への肯定的な感情への変化)をもたらししている。注目すべき態度・行動は、二点ある。

・落ち着き(陥れた継母を憎まない態度)

・思いやり(死を命じた父の後世を祈る態度)

「落ち着き」「思いやり」と表現してみたが、何か、こういうまとまりのある言葉を当てはめたいところ。動じない点、思いの深い点。この二つがほしい。表現は他のものであつてもいい。

(解答例1) 姫の、自分を陥れた継母を憎まない落ち着いた態度や自分に死を命じた父の後世を祈る親を深く思う態度。

(解答例2) 自分を陥れた継母を憎まず、また、自分に死を命じた父の後世を祈ろうとする、姫の落ち着きや親を深く思う態度。 ※まとめを終わりに持ってきた例

【冊子の解答例】

問1 a Ⅱ存続の助動詞「たり」の連体形の一部

b Ⅱ過去の助動詞「けり」の連体形の一部

c Ⅱ完了の助動詞「つ」の連体形の一部

問2 a Ⅱ亡くなる イ Ⅱ読誦なさる

問3 ①Ⅱどうして私には父だけがいて母がいないのか

②Ⅱどのような人であつても死んだ母親の身代わりと思ひ申し上げて

③Ⅱ北の方が姫君を憎むことは、継子、継母の関係ではよくあることだ

④Ⅱ一途に娘に愛情をかけていたので

問4 1 Ⅱ自分が疎ましく思う中将姫が入内を求められるほどの幸福を得ることがねたましく思えたから。

2 Ⅱ中将姫が帝への入内を前にして他の男たちを通わせているように見せかけて父豊成に姫の入内をあきらめさせるため。

問5 大切に育てた姫君が複数の男を通わせて親の愛情を裏切り、さらにこのことで宮中の笑いものになることが許せないと思ったから。(59字)

問6 1 Ⅱ姫君が複数の男を通わせているという作り話を、継母が父に讒言したこと。2 Ⅱ前世での自分の行いがよくなかったために、現世で継母に陥れられ殺されるのも仕方がないと思っているから。(50字)

問7 1 Ⅱ姫が亡き母、父、自分が成仏するために、毎日欠かさなかった読経をすること。

2 Ⅱ最期の時も父母を思い、死の運命に動じず経を読もうとする姫の篤い信仰心とけなげさ。(40字)

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。〈広島大〉

さるほどに、姫君七歳と申す春の頃、桜の咲き乱れたるを御覧じ給へば、幼き者二人来たり遊びゐたるを、三十ばかりの男、二十六七の女房来たりて、かの二人の童を、男子をば男抱き、女子をば女抱きて帰りけり。姫君、御覧じて、「如何なる者ぞ」と御尋ねありければ、乳母承り、「彼の二人の童どものためには父母にて候ふ」と言ひければ、姫君、聞こし召され、「①何として自らには父ばかりありて母のなきぞ」と仰せければ、乳母、泣く泣く申しけりは、「君三歳の御時、ア儂くなり給ひ候ふ」と申しければ、中将姫は聞こし召され、「今までも知らざりけるこそ悲しけれ」とて、急ぎ父の御前に参り給ひて、「②如何なる人にも母の形見と見奉り、慰みなん」と仰せければ、豊成聞こし召され、「あまりに姫申すに」とて、その夏の頃より俄に北の方迎へ給ふ。姫君は真の母のごとく露ほども背き給はず、従ひ傳き給ふ。

その後、中将姫は貴き御僧を招じ、称讃浄土御経を受けさせ給ひ、毎日に六卷づつ伊あそばし、母の後世菩提を弔ひ給へば、父豊成も御いとほしみは限りなし。北の方はこの姫を憎み給ひて、常には嘲り給ふ。豊成聞こし召し、「③継子、継母の習ひぞ」と、ただ大方に思ひ給へり。北の方は中将姫を失はん謀、明け暮れ案じ給ひけり。

姫君、十三にもならせ給へば、容顔美麗にして天下無双の人にて渡らせ給へば、帝よりは后に立ち給ふべき由、勅使、度々重なりければ、豊成も喜び給ひて、その御喜びは限りなし。A北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ、豊成に仰せけるは、「姫君如何なる事も出で来ん時、『生さぬ仲なれば』などと仰せられ候ふな。姫君の御方を忍びて御覧候へ」と、様々讒奏し給へば、豊成、ある日の暮れ方に、姫君の御方を北の方諸共に御覧ずれば、二十ばかりの男、直垂に折烏帽子着たるが罷り出でけり。

継母、豊成に仰せけるは、「日頃、妾が申しつゝるは空言か。女の身の習ひ、一人に契りを結ぶは世の常の事。ある時は冠を着、装束の人もあり。ある時は立烏帽子に直垂着たる人もあり。またある時は薄衣引き被きたる者もあり。見れば、法師なり。かやうに数多に見え給ふ事の儚さよ」と空泣きしつつ仰せければ、豊成聞こし召し、「人の持つまじきものは女子なり。母最期の時、④強ちにいとほしみをなしつるほどに、如何にもして世にあらせんと思ひつるに、口惜しき振舞ひしけるこそ悲しけれ。明日にもなるならば、この事漏れ聞こえ、禁中の物笑ひは豊成が女子にはしかじ」と思し召し、武士を召し、「汝、紀伊国有田郡雲雀山といふ所にてB頭を刎ねよ。後の供養をばよくよくせよ」と仰せければ、武士承り、「三代相恩の主君の仰せを背き申すに及ばず」とて、姫君を具し奉り、彼の山の奥に御供申す。大臣殿の御定の趣、詳しく申したりければ、姫君、聞こし召し、「C我、前世の宿業拙くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず。さりながら、少しの暇を得させよ。その故は、我七歳の頃より称讃浄土御経を受け奉り、毎日母尊霊に手向け奉り、今日はいまだ読まず。且つうは父の御祈りのため、且つうは母亡魂、出離生死・頓証菩提の御ため、または、自らが剣の先に掛かりなば、修羅の苦しみをも免れ、浄土の道の導とせん」と仰せられければ、D武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける。

〔中将姫本地〕による

- 5 -

注 受けさせ給ひ……教えを受けてよくお守りなさつて。

讒奏し……人をおとしいれようとして、悪口を申し上げ。

頓証菩提……すみやかに悟りを得ること。

【原文】

さるほどに、姫君七歳と申す春の頃、桜の咲き乱れたるを御覧じ給へば、幼き者二人来たり遊びゐたるを、三十ばかりの男、二十六七の女房来たりて、かの二人の童を、男子をば男抱き、女子をば女抱きて帰りけり。姫君、御覧じて、「如何なる者ぞ」と御尋ねありければ、乳母承り、「彼の二人の童どものためには父母にて候ふ」と言ひければ、姫君、聞こし召され、「何として自らには父ばかりありて母のなきぞ」と仰せければ、乳母、泣く泣く申しけるは、「君三歳の御時、儂くなり給ひ候ふ」と申しければ、中将姫は聞こし召され、「今までも知らざりけるこそ悲しけれ」とて、急ぎ父の御前に参り給ひて、「如何なる人にも母の形見と見奉り、慰みなん」と仰せければ、豊成聞こし召され、「あまりに姫申すに」とて、その夏の頃より俄に北の方迎へ給ふ。姫君は真の母のごとく露ほども背き給はず、従ひ傳き給ふ。

その後、中将姫は貴き御僧を招じ、称讃浄土御経を受けさせ給ひ、毎日に六卷づつあそばし、母の後世菩提を弔ひ給へば、父豊成も御いとほしみは限りなし。北の方はこの姫を憎み給ひて、常には嘲り給ふ。豊成聞こし召し、「③継子、継母の習ひぞ」と、ただ大方に思ひ給へり。北の方は中将姫を失はん謀、明け暮れ案じ給ひけり。

姫君、十三にもならせ給へば、容顔美麗にして天下無双の人にて渡らせ給へば、帝よりは后に立ち給ふべき由、勅使、度々重なりければ、豊成も喜び給ひて、その御喜びは限りなし。北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ、豊成に仰せけるは、「姫君如何なる事も出で来ん時、『生さぬ仲なれば』などと仰せられ候ふな。姫君の御方を忍びて御覧候へ」と、様々讒奏し給へば、豊成、ある日の暮れ方に、姫君の御方を北の方諸共に御覧ずれば、二十ばかりの男、直垂に折烏帽子着たるが罷り出でけり。

継母、豊成に仰せけるは、「日頃、妾が申しつゝるは空言か。女の身の習ひ、一人に契りを結ぶは世の常の事。ある時は冠を着、装束の人もあり。ある時は立烏帽子に直垂着たる人もあり。またある時は薄衣引き被きたる者もあり。見れば、法師なり。かやうに数多に見え給ふ事の儚さよ」と空泣きしつつ仰せければ、豊成聞こし召し、「人の持つまじきものは女子なり。母最期の時、強ちにいとほしみをなしつるほどに、如何にもして世にあらせんと思ひつるに、口惜しき振舞ひしけるこそ悲しけれ。明日にもなるならば、この事漏れ聞こえ、禁中の物笑ひは豊成が女子にはしかじ」と思し召し、武士を召し、「汝、紀伊国有田郡雲雀山といふ所にて頭を刎ねよ。後の供養をばよくよくせよ」と仰せければ、武士承り、「三代相恩の主君の仰せを背き申すに及ばず」とて、姫君を具し奉り、彼の山の奥に御供申す。大臣殿の御定の趣、詳しく申したりければ、姫君、聞こし召し、「我、前世の宿業拙くして、人の偽りにより汝が手

- 6 -

に掛かり、消えなん事力及ばず。さりながら、少しの暇を得させよ。その故は、我七歳の頃より称讃浄土御経を受け奉り、毎日月尊霊に手向け奉り、今日はいまだ読まず。且つうは父の御祈りのため、且つうは母亡魂、出離生死・頓証菩提の御ため、または、自らが剣の先に掛かりなば、修羅の苦しみをも免れ、浄土の道の導ともせん」と仰せられければ、武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける。（「中将姫本地」による）

問1 二重傍線部a・cの「る」について、それぞれ文法的に説明せよ。

- a 「
b 「
c 「

問2 波線部ア「儂くなり」、イ「あそぼし」は、ここではどのような意味か。現代語の終止形でそれぞれ答えよ。

- ア 「
イ 「

問3 傍線部①～④を、必要な語句を補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

- ① 「
② 「
③ 「
④ 「

問4 波線部Aに「北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」とある。

1 北の方が「安からず思し召し」たのはなぜか。簡潔に説明せよ。

【目安】 60字

2 何のために、「人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」たのか。簡潔に説明せよ。

【目安】 60字

◎問5 波線部Bに「頭を刎ねよ」とある。豊成が姫を亡き者にしようとしたのはなぜか。六十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問6 波線部Cに「我、前世の宿業拙くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず」とある。

1 「人の偽り」とは何か。「人」が指す人物を明記して、具体的に説明せよ。

【目安】 30字

2 姫君は、「消えなん事力及ばず」とこの事態を受け入れる。それはなぜか。「前世の宿業」を解説しつつ、五十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問7 波線部Dに「武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける」とある。

1 「しばらく時をぞ移しける」とは、姫が何をする時間を取ったのか。具体的に説明せよ。

【目安】 40字

2 ここで、武士は何に心を動かされたのか。四十字以内で答えよ（句読点を含む）。

【解答】

問1 a Ⅱ存続の助動詞「たり」の連体形の一部

b Ⅱ過去の助動詞「けり」の連体形の一部

c Ⅱ完了の助動詞「つ」の連体形の一部

問2 アⅡ亡くなる イⅡ読誦なさる

問3 ①Ⅱどうして私には父だけがいて母がいないのか

②Ⅱどのような人であっても死んだ母親の身代わりと思い申し上げて

③Ⅱ北の方が姫君を憎むことは、継子、継母の関係ではよくあることだ

④Ⅱ一途に娘に愛情をかけていたので

問4 ⅠⅡ自分が疎ましく思う中将姫が入内を求められるほどの幸福を得ることがねたましく思えたから。

ⅡⅡ中将姫が帝への入内を前にして他の男たちを通わせているように見せかけて父豊成に姫の入内をあきらめさせるため。

問5 大切に育てた姫君が複数の男を通わせて親の愛情を裏切り、さらにこのことで宮中の笑いものになることが許せないと思ったから。（59字）

問6 ⅠⅡ姫君が複数の男を通わせているという作り話を、継母が父に讒言したこと。

ⅡⅡ前世での自分の行いがよくなかったために、現世で継母に陥れられ殺されるのも仕方がないと思っているから。（50字）

問7 ⅠⅡ姫が亡き母、父、自分が成仏するために、毎日欠かさなかった読経をすること。

ⅡⅡ最期の時も父母を思い、死の運命に動じず経を読もうとする姫の篤い信仰心とけなげさ。（40字）